

触媒としての身体

— 大田洋子「暴露の時間」論 —

中野 和典

序

「被爆者の裸像」という言葉からどのような像イメージが想起されるだろうか。焼けだたれた顔、背中、四肢。炭化して塑像のようになってしまったうつむく、あおむく焼死体（もはやこれは裸像と呼んではいけないのかもしれない）。見る者に衝撃を与える被爆者の痛々しい裸像は、原爆の像を構成するものとして重要な位置を占めている。一度それを目にした者が原爆を思い浮かべるとき、その像には被爆者の裸像がほとんど常に付随していると言えるほどである。

大田洋子の「暴露の時間」（『世界』一九五二年六月^①）は、そのような被爆者の裸像をめぐる問題を描いた短編小説である。これは一九五一年から五二年の広島を舞台に、その火傷の深刻さから「原爆二号」と呼ばれるようになった平井熊太が、外来者から求められるままに裸像をさらしていた入院生活に終止符を打ち、自分の裸像の絵葉書を売る店を始める姿を描いたものである。「暴露の時間」の結末は、ストリップを見に行った熊太が「おれの方がストリップなんだ。見ているやつの方が露出症患者なんだ」と

思い、涙を流す場面で終わっているが、なぜ熊太は涙を流さねばならなかったのだろうか。

本論では、平井熊太のモデルとなった「原爆一号」こと吉川清の二つの体験記と「暴露の時間」との比較を通じて、この小説が文字通り暴露しているものの内実を明らかにしたい。

一 転倒の危機

「暴露の時間」の主人公・平井熊太のモデルが、「原爆一号」こと吉川清であることは明らかである。吉川は『平和のともしびー原爆第一号患者の手記』（一九四九年八月、京都印書館）と『原爆一号』といわれて（一九八一年七月、筑摩書房）という二つの体験記を書いており、「暴露の時間」とそれらを比較すれば、吉川の体験がどのような形で小説に取り入れられたかある程度確かめることができる。大田洋子と吉川との交流は一九五一年頃に始まったようだ。大田はエッセイ「広島から来た娘たち」（『世界』一九五二年八月）で次のように書いている。

吉川清さんには、昨年広島に行つたときたびたび会つた。

（略）私は太陽のやけつく爆心地で、皮膚の真黒に陽やけした、からだの非常に細い婦人を見かけた。その人は乳母車くらしいの小さい車の上に板をおいて、絵葉書や原爆放射能で焼けた石ころなどを並べて売っていた。（略）ふと気づいて見ると、乳母車の店の天幕の屋根に、ローマ字で原爆一号吉川清の店という看板がかかっている。私はある衝撃をかんじた。これが原爆第一号の、世間に迎えられた姿なのかと思つたの

だ。原爆第一号という、あまり好ましくない名称は、ほかの誰でもなく、吉川氏が日赤に五年半いるうち、次から次にやつて来て彼を見物した日本人と外国人のうち、アメリカの新聞記者の一人が、この男の背中こそナンバー・ワンだと云つたところから、はじまつたものである。陽やけのひどい痩せた婦人は吉川氏の細君だつた。そのひとと私は暫く手をとり合うようにして泣いた。そこに吉川氏もどこからもどつて来た。四月に病院を出てからろくに住む家もないので、雨の日も風の日も町々をうろうろ歩いていると云つていた。

誰も彼を救わない。あべこべに売名的だと云つて、そのころもう世間的圧迫が彼には加えられていた。このことについては、同じように原爆障害者の洋画家、福井芳郎氏が新聞の談話で次のように云つている⁽²⁾。「あんなにひどいからだで、生きていること自体が奇蹟に近い。からだを売りものにしたところで、本人さえよければ放つておけばいいではないか。

あのすごいケロイドこそ、悲惨な原爆戦の記念なのだから」大田は「原爆第一号の、世間に迎えられた姿」が原爆の遺物を販ぐ貧弱な店の主でしかないことに驚き、吉川が原爆を売りものにしていて(自分が受けた原爆傷害を宣伝に利用して原爆の遺物を買っている)売名者として非難を受けていることに同情を示している。原爆を売りものにしていてという非難は、当時、大田自身もあからさまに受けていたものでもあったので⁽³⁾、言わば同じ痛みを分かつ者として吉川への同情の念が強くなったのかも知れない。

このような大田からの同情を吉川はどのように受け止めていたのだろうか。大田のエッセイから約三十年後に書かれた『原爆

一号』といわれて』の中で、吉川は次のように當時を振り返っている。

大田洋子さんから電話があつた。すぐに会いたいという。かつて彼女は雑誌「世界」に書いた文章の中で、吉川清は(原爆一号)と呼ばれるようになってから、彼の悲劇がはじまつた、一刻も早くこの名前を返上すべきである、といった。人の目につきやすいこの名前を逆手にとつて、私が原爆や被爆者について発言したり行動したりしていることに、一種の危惧の念を表明したものであつた。

両者の言い分には微妙な齟齬が認められる。大田はエッセイで「原爆第一号という、あまり好ましくない名称」という言い方をしたけれども、吉川が言うように「一刻も早くこの名前を返上すべきである」とまでは言っていない。むしろ福井芳郎による「本人さえよければ放つておけばいい」という談話を引用して、「原爆一号」という名称を利用する生き方を消極的に認めているのである。好ましくない名称ではあるが、誰からの援助も受けられない以上、吉川が「原爆一号」を看板にして糊口をしのいでいることを非難するべきではない、と彼を擁護する立場を大田は表明しているに過ぎない。ただし、「雑誌「世界」に書いた文章」という吉川の言葉が、「広島から来た娘たち」だけではなく「暴露の時間」をも指していると考えれば、確かに大田は吉川が「原爆一号」という名前を利用して行動していることに「一種の危惧の念」を表明していたと言える。「暴露の時間」は、「原爆二号」こと平井熊太の物語を通じて、「原爆一号」こと吉川清が直面していた問題を暴いた、暴露小説として読めるからである。

小説には、その三年前に書かれた『平和のともしび』では語られていなかったが、約三十年後に書かれた『「原爆一号」といわれて』では語られようになつた吉川の体験が多く取り入れられている。「たびたび会つた」という二人の親密さから考えると、それらは大田が吉川に直接取材したものと推測できる。まず、熊太は入院している「日本博愛病院」⁽⁴⁾の医師と次のような会話を交わす。

「君の耳にははいつていないかも知れないけれどね、大分あちこちで言つてるそうだ」

「なにをです」

「平井は外国人にものをねだつたりする、乞食のようなやつだという噂なんだがね」

「——ああ、その噂ですか。それなら知っています。私の悪評は、年中みだれ飛ぶですな」

平井はとつきに答えた。はじめて耳にする噂だったが、知らないというのには、痛手が深すぎる。

〔暴露の時間〕第一節

「原爆二号」として有名になつた熊太が、海外から寄附を受けていることに對する周囲からの非難が、初めて熊太の耳に入った瞬間を小説は描き出している。このような非難は吉川が入院中に書いた『平和のともしび』にはまったく見られないが、『「原爆一号」といわれて』には次のような記述がある。

“原爆一号”といえば、大きなケロイドのあることをよいことにして、凶々しくも自ら“原爆一号”などと称して、売名とケロイドを売り物にして生きているいやらしい奴ぐらいい

しか思っていない人もまた、少なからずあつたようである。その証拠に、そうしたたぐいの非難や中傷をいやというほどに、直接間接に聞かされてきたものであつた。中には悪意に満ちたものもまれではなかつた。

〔「原爆一号」といわれて〕第三章

入院中から吉川が売名者としてしばしば非難を受けていた様子うかがえる。このような非難は敗戦直後の貧窮にあつて「原爆一号」として吉川が内外の著名人から慰問を受け⁽⁵⁾、厚遇されているように見られたことが、必然的に引き起こした反応だつた。

しかし、「原爆一号」としての彼の処遇は人々から羨まれるようなものではなかつたようだ。「暴露の時間」の熊太は医師に次のように訴える。

月日はすぎて行つたが、熊太と千里の全身的な深い火傷に、来る日も来る日もリバノール・ガーゼだけがあてがわれ、とり替えられた。(略) 化膿どめのアクチゾールが病院にあることを、熊太は知つている。院長はそれを熊太夫婦に使うことを、それとなく拒否していた。街は廢墟であつた。一つの中都市全体の、茶褐色の瓦礫のうえに、雪がふつている。一軒の家もなく、人間も住んでいなかった。壊れかかつた病院は、手持の薬品を無料入院の患者に使うことをおそれていた。(略) 二年間。二年間ですよ先生。リバノールだけで二年経つたのですよ。金をもつて入院している患者はどしどし退院しています。無一文の僕たちは、流れるほどの膿のなかに寝て、二年間、アクチゾールの夢を見ている——」

〔暴露の時間〕第二節

患者の経済力によって処遇に違いがあったこと、その背景には廢墟と化した広島街全体の窮状があったことが小説には描き込まれていない。このような処遇の違いも入院中に書かれた『平和のもしび』では一切触れられていない。しかし、『原爆一号』といわれて』では、入院中の方が次のように回想されている。

ひどい痛みをうったえても、痛み止めの薬ももらえなかった。毎日の治療は、いたって簡単なもので、傷口をマーキョ口液でふきとったあとは、リパノールガーゼをかぶせるだけのものではなかった。

ある時、回診の医師に思いきつてたずねてみた。——潰瘍はいつまでたつても膿もとまらないし、痛みもとれないが、ほかによい薬はないのでしょうか。

医師の答は、まったく素つ気ないものであった。

——ケロイドの上にできた潰瘍は、そう簡単になおるものではない。ほかにこれという薬はない。

しかし、私は、医師の間に治療法に意見のちがいがあるところを知っていた。また、別のときにおそるおそるたずねてみた。——なんとかいよいよい薬があるそうですが……。だが私は、生活保護のわが身を思い知らされただけのことであった。——そんなに高価な薬の使える患者ではない、と。

（『原爆一号』といわれて』第三章）

吉川は「原爆一号」として人に羨まれるような特別な治療を受けていたわけではなかった。熊太が妻・千里に語った「世間ではわしとお前がこの病院で、よつぽど大事にでもされているように思つておる。それは誤解だ」（第三節）という言葉に端的に表れて

いるとおり、病院での処遇については、吉川への妬みが根拠のないものであったことを「暴露の時間」は明らかにしている。

また、退院後に土産物屋を始める熊太の物語も、吉川が直面していた問題を露わにするものであった。産業奨励館（原爆ドーム）近くで土産物屋を始めた熊太は近所の寺の住職・森有哲が被爆した瓦を売っていることを知る。

青年は久遠寺の現在の住職の森有哲だつた。大学を出たばかりで召集されて戦場に行き、終戦後、原子沙漠とよばれた壊滅の街に帰つて来た。肉親は一人のこらず、灰燼になつた寺とともに死に絶えていた。彼は寺の相続者として寄付を募り、原子爆弾の犠牲者の供養塔を建て、バラックの寺を再建した。人は供養塔を見て涙をうかべるが、寺自体への参詣人は皆無であつた。森有哲は原爆記念会を作り、自分の寺では「被爆の瓦」というものを頒布、販売していた。

（「暴露の時間」第四節）

この森有哲のモデルらしき人物について吉川は次のよう語つてゐる。

私たちが商売をしているすぐそばに、西蓮寺さいれんじと不動尊があつた。この寺の住職は、元陸軍中尉とかいうことであつたが、近所の評判はまことに悪かつた。（略）住職は、子供たちを使つては原爆瓦を集めさせていた。それは、原爆の高温の熱線で瓦の表面が変化したもので、溶けたようになつてゐるもの、ぶつぶつと粒状になつたもの、泡立つようになつてゐるものなどがあつた。住職は、それを観光客に売つていたのである。原爆瓦がよもや売り物になるなどは思つてもみなかつた。

た私は、それを無料で観光客にやるようになった。

（『「原爆一号」といわれて』第四章）

元軍人の住職という経歴の一致から見ても、森有哲のモデルは吉川の語る住職であったと考えられる。被爆瓦の販売は実際に行われていたことのようにだ。さらに森有哲は商売の宣伝に「原爆乙女」を利用しようとする。顔に重症の火傷を負った小川景子が森有哲の元を訪れる。

「この寺で原爆の瓦を売る気はない？」

景子は有哲に返事をせず、熊太の顔を見た。熊太もだまっていた。その顔に、荒い風にふきつけられてでもいるような、ほの暗い荒みがあつた。有哲は景子を誘つて、住居のある寺の裏側に姿を消した。

（「暴露の時間」第五節）

このような「原爆乙女」を看板娘にする商売についても、吉川は次のように語っている。

原爆ドーム下の私のみやげ物店の近くに、同じ商売をしている夫婦者があつた。（略）ある日、彼の店には顔にケロイドをもつ娘さんが店番に立つようになったのである。そして、こともあろうに男は、——わたくしは、このような（原爆乙女）たちのために（暁の家）という施設をつくる計画をしています。店の純益はこの施設のための資金にします。といって商売するのであつた。（『「原爆一号」といわれて』第五章）

「原爆乙女」を宣伝に利用する商売も実際に行われていたことだつたようだ。吉川が語る瓦を売る住職と「原爆乙女」を看板娘にする土産物屋は別の人物であるが、森有哲はこの二人を一元化する^{リフレディ}ことで、原爆を商売に利用するという性格を強調した人物とし

て造形されている。

このように「暴露の時間」には吉川の体験を多く取り入れられているが、大田の創作であることが一見して明らかであるところもある。その最たるものは、森有哲が売ろうとする偽被爆瓦^{にせ}の数である。

放射能のために焼け溶けた、爆心地ちかくの瓦は、苦心して集められ、約千点が原爆資料館に保存されているというのだつた。熊太は、表面が爆弾の熱線のため変色し、粒状の薄膜を形成している瓦が、この街に千枚ばかりしかないとは思わなかつた。しかし七年後の現在、二十万枚という数字の示す、ある危険な感じを斥けることも出来ないのだ。

（「暴露の時間」第六節）

森有哲は、長谷川という協力者と二人だけで二十万枚の被爆瓦を売ろうとしているというのだが、この二十万枚という数字は明らかに過剰である。この過剰さは、「二十万枚」という数字の示す、ある危険な感じ」という言葉にあるとおり、その瓦が原爆の熱線とは別のもので焼いて作られた偽物であることを示しつつ、二十万枚もの瓦を二人だけで販売することは現実的に不可能であることから、そのようなことを企てていた人間が実際にいたはずがない^{リアリティ}ということも示している。吉川が体験していた問題を明かすことで現実性を獲得していた「暴露の時間」は、この点、それが虚構であることを全く隠そうともしない。ここで問うべきは、その虚構によつて何が見えてくるのか、ということだろう。偽被爆瓦のエピソードによつて明らかになるのは、平和運動と経済活動との関係の危うさである。森有哲と熊太は次のように語り合う。

「君は瓦や湯呑のことで、なにか暴露しなかつたでしようね」

「私はそんなものを暴露した覚えはありません。しかし瓦や湯呑の問題だけでなく、いろんなものを時間が暴露して行っているのはたしかです。暴露するのは時間というやつですよ」

「僕等は原爆の瓦を通して平和運動をしようとしたんですよ」「逆ですよ。逆なものは時間が片つぱしから暴露してゆくです」

〔暴露の時間〕第六節

「暴露の時間」という題名につながる場面である。暴露されるのは、偽被爆瓦のことばかりではなく、「いろんなもの」であり、それを暴露するのは時間であると熊太は言う。「いろんなもの」を「暴露して行っている」というその時間を、物語の設定時間であり、小説の成立時でもある一九五二年と考えれば、熊太の言葉は一種の予告として見ることができる。現にGHQによる占領から日本が独立したこの年には、原爆被害が多くの写真集を通じて公開されているの。よく知られている「アサヒグラフ」の「原爆被害の初公開」（一九五二年八月六日）を始め、『岩波写真文庫72 広島―戦争と都市』（一九五三年八月、岩波書店）、『原爆第一号 ヒロシマの写真記録』（一九五二年八月、朝日出版社）、『記録写真 原爆の長崎』（一九五二年八月、第一出版社）等、それまで検閲によって衆目にさらされることのなかった被爆者の痛々しい裸像を掲載した写真集が堰を切ったように次々と発行されたのは、「暴露の時間」が発表された一九五二年六月の直後のことであった。このような同時代の文脈を合わせ見ると、熊太の言葉は、被

爆者の受けた被害がどれほどのものがあったかが、これから暴露されるということを予告する形になっているのである。

ただし、熊太自身がその予告によって、単なる告発者になつていないことには注目する必要がある。熊太によれば、時間によって「片つぱしから」暴露されるのは「逆なもの」である。ここで言う「逆なもの」とは「原爆の瓦を通して平和運動をする」ことの逆、つまり「平和運動を通して原爆の瓦を売る」ことを指していることになる。すなわち、経済活動を手段として平和運動をしているようである。その実、平和運動を手段として経済活動をしている「逆なもの」は、その不当性が時間によって暴露される、ということ熊太は予告していることになる。時間が暴露すると言つても、何かを暴露するのは常に人間であることを考えると、これは時間が経てば何者かが不当性を暴いていくのだという信念を語つたものと考えた方が良さだろう。そしてその信念が強いほど、いずれ告発されるのは自分かもしれないという熊太の不安も大きくなるのである。

熊太はしかし、自分の胸の底に、なにかの黒い影のあることを感じつつづけていた。自分もまた、己れの戦争による傷害の肉体を、媒介としてでなくては生きられないと考えているのではないか。己れの不具を、売物に。方向をまちがえれば、そうなるのだ。思想を踏みはずし、墮落すればいつでもそうなり得る。

〔暴露の時間〕第六節

自らの裸像を絵葉書にして売り始めた熊太は、自分もまた「逆なもの」（平和運動を手段として経済活動をする）によって生活の糧を得ているだけの人間になりかかっていることを痛感してい

る。「黒い影」とはそのように原爆を売りものにするこの後ろめたさを示したものと考えて良いだろう。熊太の裸像と被爆瓦は原爆による熱線の痕跡をとどめる類似物（類似商品）として並置されている。そして、その瓦が捏造された偽物になっていることよつて、熊太のふるまいそのものも偽物になる危険にさらされていることが象徴的に示されているのである。むろん熊太の火傷は原爆の熱線に焼かれたためにできた本物である。しかし、平和のためと称して、その実、ただ自分が生活するためだけに裸像を売っているのだとすれば、そのふるまい自体は虚偽を含んだものになつてしまふのである。

このように「暴露の時間」は、熊太の物語を通じて吉川が直面した病院での差別的な処遇や爆心地周辺での原爆を利用した商売のありさまを暴露しつつ、過剰な枚数の偽被爆瓦をめぐるエピソードによつて平和運動（目的）と経済活動（手段）の転倒に対する危機感をも描き出している。この危機感が杞憂であつたのか否か。小説の結末で熊太が流す涙は、その問題と無関係ではない。

二 裸像を売る者

「暴露の時間」の結末部、熊太は森有哲とともにストリップを見に出掛け、そこで涙を流す。熊太の落涙は、ストリップの前に演じられていた余興の猿回しを見た時に始まる。

猿は年をとりすぎていた。病みあがりのような、やつれた様子をしていた。（略）猿は何度目かに廻つて来たとき、竹の輪の一步手前で頭をさげることゝ忘れた。猿はそこをく

ぐりそこね、竹の輪を倒し、自転車から落ちた。見物人たちは声をあげて笑つた。熊太も笑つた。しかしすでにこのとき、熊太の眼に涙の一粒が浮かびあがつていた。彼は猿の姿を、なにかの象徴のように考え意識したわけではなかつた。それにもかかわらず彼の眼は泣いていた。（「暴露の時間」第六節）

熊太は猿を見て笑いつつ、泣いてもいる。相反するように見える笑いと涙の衝動が同時に起こっているのはなぜか。その理由は「猿の姿を、なにかの象徴のように考え意識したわけではなかつた」という言葉に表れているように、まだはつきりと自覚されていない。この猿回しの場面は、大田が読んだ前出の新聞記事を取り入れて書かれたものと考えられる。吉川は次のように語っている。

三階の吉川さん、一階の応接室へ——マイクがそう叫ぶごとに、家内の肩にすがつて病院の階段をおりた。施療患者だからエレヴェーターにも乗せてくれない。応接間ではいつも内外人の視察客がつかめかけ、まっぱだかになつてあつちを向け、こつちを向けでバチ／＼写真をとられた。わたしはサル回しのサルのようにだと思つた。それでも世界の人々に「ノーモア・ヒロシマズ」と訴えられるものなら……とこらえた。

大田がエッセイ「広島からきた娘たち」で引用した福井芳郎の談話は、この吉川 of 言葉に続くものである。大田がこの記事を読んだことは間違いない。吉川は裸になり言われるままに身体向きを変え、自分を猿回しの猿に喩え、その時の屈辱感を表そうとしたのだつた。熊太は単なる見る者（見物人）として猿に向かい合つていてのではない。嘲笑にさらされる猿の姿に見られる者としての自分の姿を重ねているのである。熊太は猿の姿が笑いを誘う

ものであるにもかかわらず泣いているのではなく、笑いを誘うものであるがゆえに泣いたのだった。

「暴露の時間」の結末部における涙については、小説内部に方向性が示されている。森有哲は、「原爆乙女」・小川景子に会ったときに自分が流した涙について熊太と語り合う。

「あの顔をみたとき、僕が泣いたのを知っていますか」

「知っていますとも。ひどく泣きましたね」

「いきなり悲しくなつたんだな。しかしあれは自分を泣いたようなものです」

「それも僕にはすぐわかりましたよ。みんな人の傷を見て、自分の傷の深さに気づいて、泣き出すんですからね」

（「暴露の時間」第六節）

ストリップ小屋へ行く道すがらに交わされるのこのやりとりが、結末部の熊太の涙を解釈する手引きの役割を果たしている。すなわち熊太の涙も「自分の傷の深さ」に気づいたことによつて流れたものであった。では熊太にとつての「自分の傷」とは何だったのか。熊太が自分の姿を重ねるストリップパーたちの描かれ方に注目したい。

女体は次から次に出て来た。どの顔にも微笑がなかつた。思ひ出したようにときどき笑つた顔になつたが、いつたんうしろ向きになつてから正面を向いたとき、微笑は消えていた。

充分に踊ることもできないほどぼてぼてしたからだの、乳房の萎えた女もいた。何人か子供を生みでもしたように、からだ全体の線のくずれた女、顔にしわのある女、未成熟な十五六の少女の裸像。これらがうごめき、くねり、臀と股と乳房を誇

示して、いやいやながら踊り、観衆の求める握手に、舞台の端にひざまずいて、手をのびし握手する。その多くの手はうす黒くよごれていた。熊太の横の手すりに腰かけている、酒気をおびた男が、ひとり言を言つた。

「なんだかしらんが、見ているうちに寂しくなつたね」

（「暴露の時間」第六節）

次々に現れるストリップパーたちは、一樣に性的な魅力を欠いたものとして描かれている。観衆も、はやし立てたり、笑つたり、寂しくなつたりといった反応しか見せていない。つまり、ここに描かれているのは性的な興奮を喚起しようとして、それに失敗し続けているストリップパーたちなのである。熊太が見ているのは単なるストリップではなく、踊り手の意図とは別の反応によつて迎えられるであろうストリップなのだ。熊太が彼女たちに自分の姿を重ねたのだとすれば、彼自身は自分の裸像によつて何を喚起しようとし、それに失敗し続けたことになるのだろうか。そこで先に取り上げた平和運動と経済活動の転倒の問題が浮かび上がってくる。熊太は、平和運動の一環として裸像をさらしてきたはずだった。しかし、熊太は次第に「この人間はなにをくれるのだろうか、福袋でも待つように考えて見たり、寄附ならどれだけの金をよこすだろうか」と、そのことばかり考えるようになってきた（第三節）のであり、今や原爆で負つた傷を商売に利用しているだけなのかもしれないと自らを危ぶむようになってしまった。熊太がストリップパーたちの姿に見た「自分の傷」とは、単に原爆によつて受けた傷を指しているのではなく、その傷を見せることによつて続けてきたはずの平和運動が、結局失敗してしまっていること

を指しているのだと考えていいだろう。それゆえ熊太は厳しい自己否定に向かわざるを得ないのである。

(ストリップを見ながら泣くやつがあるか)

熊太は心でそう思っていた。しかし涙は勝手に頬につたわつて落ちた。彼は思つた。

(おれの方がストリップなんだ。見ているやつの方が露出症患者なんだ) 熊太は自分の涙の性質を、探ろうとし、それをどこかへもつて行こうとした。瞬間的に、ラクダの外套が小さく切られてしまい、それを売らねばならなかつたことや、小川景子の永久にとり戻せない半人間的な容貌のことや、猫を犬のようにつれて爆心地に往復する、みすばらしい姿の妻のことなどを、一こまずつ、次々に脳裏に描きだした。

熊太は舞台を見ながら、泣いていた。

(「暴露の時間」第六節)

自らを「露出症患者」と呼ぶことは、裸像をさらし続けてきた自分の行為を、裸を見せて自己満足を得てきただけのものとして貶めることを意味している。元には戻らなくなつた海外からの寄贈品や身近な被爆者のことを瞬時に想起しつゝ熊太が流す涙は、自らを無価値な者として意味づけざるをえなくなつたことに對する自己憐憫によるものと考えられる。このような自己否定は、無論、熊太の行動に対する人々からの反応によつて引き起こされるものである。ストリップパーたちは嘲笑をもつて観衆を迎えられた。熊太の裸像はどのような反応を引き起こしたのだろうか。

三 資料化される身体

裸像をさらすことが平和運動になりえていないという熊太の自覚は、彼一人の意識によつて成り立つものではなく、熊太の行動に対する人々からの反応から生まれたものである。入院中から熊太は自分が見世物になりつつあることを嘆いていた。

わしは原爆一号同様、だんだんと見世物になつて行つた。外国人ばかりではない。東京から京都から、九州から北海道から、知名な人間がやつてくると、院長はじめどの人間も愛想のいい様子になつて、わしを引き出しにくるのだ。わしがその見世物になり切つて、機械のようにもの馴れた手つきで着物をぬいで、丸裸のケロイドのからだをさらけ出して見せるのを、人はいつたいどう思つて見ているんだ――

(「暴露の時間」第三節)

熊太は初めから自分が見世物であつたとは思っていない。内外からの訪問者がある度に引き出され、熟練のストリップパーよろしく「機械のようにもの馴れた手つきで」着物を脱ぐようになるまで裸像をさらすことを反復するうちに、自分が見世物になっていることに気づくのである。そして、退院後には、もはや裸像が熊太の生活をぎりぎりに支える程度の関心しか持たれなくなつていくことが、森有哲と熊太の妻・千里との会話に表れている。

「一日の売上、どれくらいになりますか？」

「ならし百二十円くらいでしょうか」

千里はおとなしく正直に答えた。

「美しい絵葉書ではないので、あまり人が買つてくれません。広島の人はい思ひ出すのもいやなように、なんとも言えぬ顔を

してさつきと行つてしまします」

「米国人は買わんですか」

「近よつて来て、お土産に買つて行こうとするように、一枚見るのですが、見ているうちにいやな顔して、買うのもやめて、大股に行つてしまうのですよ。たまにアメリカ以外の外国の兵隊が、だまつて買つてくれます。たまには気の毒ですわねと言つたりします」

「雨のふる日もあるのに、夫婦で一日に百二十円では話にならんじやありませんか。(略)」

〔暴露の時間〕第四節

裸像の絵葉書は、嫌悪感を引き起こすものとさえ語られている。

たまに絵葉書を買う米国以外の外国の兵隊から、気の毒ですわねと声をかけられるのが唯一の積極的な反応だといふのである。気の毒だと言ふのは原爆によつてできた火傷に対してか、「原爆二号」が古い手押し車で売れない土産物屋を営んでいることに対してか、あるいはその両方か。このように、裸像をさらす自らの行為が平和運動になりえていないといふ熊太の自覚は、人々からの反応の冷淡さから生じたものであつた。

熊太がたどり着くことになつた挫折は、吉川が「原爆一号」として体験した挫折を合わせ見ることで一層重大な問題に通じていることがわかる。そもそも吉川はどのような経緯で裸体をさらすことに特別な意味を見出すようになったのだろうか。入院中に書かれた『平和のともしび』によれば、一九四七年の春、広島赤十字病院庶務部に勤務していた山根元吉から「原子爆弾の研究のためにあなたの身体を提供してはどうですか」と提案されたことがきっかけになつたことが記されている。それを聞いて吉川は次の

ように考えたという。

私一人が原子爆弾症の患者ではない。広島、長崎には何千何万の原子爆弾罹災者がゐる、私以上に重症の人が他に多数あるに違ひない。その数多くの人々の中から特にいま原爆患者として学問の研究対象となつていふことは有意義なことである。山根さんの言はれたやうに或は考へようによつては見世物のやうな感じがしないではないが、苦痛のあまりに一旦は死を決したこともあつた身体ではないか、それが研究のお役に立つといふことは願つてもない幸福であると思つた。

(略) 神が私に重大な使命を授けられたにちがひない。その使命こそはこの身体を世界平和のくさびとして世界医学界の実験台に捧げよといふことであろう。そうだ、私は実験台上で死んでも満足である。原子医学の研究のための貴き資料とならば仮命令を捨ててもこれ以上の幸福はない。

〔『平和のともしび』〕

吉川は「世界平和」と「世界医学」のために自分の身体を資料として差し出さねばならないという強い使命感を持つに至る。この頃、吉川は病院を訪れる外国人の前に引き出されるようになり、彼らから感嘆され、激励されることに「名誉」と「責任」を感じるようになっていたという。それは一年数ヶ月にわたる闘病生活の中で、原爆で負つた傷に積極的な意味が感じられるような唯一の出来事だつたのだろう。このような使命感の高まりは、同年八月、吉川を紹介する記事が米国の写真雑誌「ライフ」に掲載されたときに絶頂に達した。

八月末、「ライフ」の東京支局から私に「ライフ」が恵送

されたが、それには大きく一頁に私のケロイドの写真がかゝげられてゐた。記載された記事を武島先生に翻訳してもらふと次のやうなものであつた。

「ミスターキヨシ、キツカワは原爆の犠牲となつて現在も病床に横たわつてゐる。彼の腕と背中が『ケロイド』と呼ばれる角質の皮（蔽物）の大きくなれる塊で覆はれてゐる。先週彼は次の如く語つた。

アメリカへ帰れば皆様に次のやうに伝えて頂きたい（背中のケロイドを指しながら）。このケロイドが何かに良いことをもたらすのであつたら私は喜んで死なう。そしてこの私の身体で原子爆弾に関して医学的実験が出来るならばアメリカへ送られることを望んでゐる。世界平和のために何かの役に立つことが出来るとすれば私は仮令死んでも後悔はない。」

（略）世界平和のくさびとしてこのライフを通じて世界各国に日本の原爆第一号患者吉川清として伝えられたからには、この広島市民を代表して恥しくないだけの立派な人格を持たなければならぬ。一つの希望を持つたことでそれに付随してすべてのことがかくも身体中が熱くなることすらあつた。

（『平和のともしび』）

「原爆一号」としての注目度が高まるとともに、吉川も「広島市民の代表」という、より重大な使命を負う者として自らを意味づけるようになる。後日、「ライフ」を読んだ米国人読者から吉川の発言に対して「私たち米国人に多大な感銘を与えました。君の言葉に多くの米国人は同意し決して忘れはしないでしよう」⁽⁷⁾という手紙も届いたという。この頃が、吉川が「原爆一号」として

過ごした最も華やかな時期であつたと言えるだろう。

しかし、吉川の振る舞いが自身の言葉どおり、「世界平和」と「世界医学」に貢献するものになりえていたかどうかは慎重に検討する必要がある。三十年後に書かれた『「原爆一号」といわれて』においては、ライフからの取材という同じ出来事が、明らかに異なる文脈で語られているのである。

私は、心の中で叫びつづけていた。

——この身体をよく見るがよい。これがお前たちの国が投じた原爆で焼かれて生き残つた人間の身体じゃ。この身体をもとにかえせ、まどうてくれ。

取材の一行との間に問答がはじまつた。（略）最後に、特に何か特別にいつておきたいことはないか、とたずねられた。その時とつさに思つたことは、この傷だらけの肉体を体ごとアメリカ国民の良心にぶつけて、原爆の非人間性、残酷さをうたえたい、機会があれば渡米してうたえたいということであつた。（『原爆一号』といわれて』第三章）

ここでの吉川は、原爆の「非人間性」と「残酷さ」を米国民に訴える告発者として当時の自己を振り返つてゐる。原爆の「非人間性」と「残酷さ」を訴えることは、そのまま反核兵器を求めるところにつながるだろう。ケロイドに覆われた身体によつて反核兵器を訴えようとする吉川に、大江健三郎の言う「核兵器の廃止をもとめる運動に加わることで、人類すべてのかわりに自分たちが体験した、原爆の悲惨さを逆手にとり、自分の感じている恥あるいは屈辱に、そのままみずからの武器としての価値をあたえようとする」⁽⁸⁾人間の姿を見ることが出来るかもしれない。これは『平

和のともしび』には見られない「原爆一号」の姿である。『平和のともしび』における吉川の発言には、「世界平和」への貢献と
言いながら、原爆の残虐さを米国民に訴え、反核兵器の立場を示
すという告発の姿勢は全く見られない。だからこそ米国人からの
反応も「君の言葉に多くの米国人は同意し決して忘れはしないで
しよう」という共感に満ちたものになりえたのである。なぜ、同
じ出来事がこれほど異なる文脈で語られているのだろうか。

同じ経緯であっても、それを振り返っている時点の違いによつ
て意味づけ方が変わるのには珍しいことではない。この変化は、後
に冷淡な反応を受けるようになった結果、取材当時の光景が屈辱
的なものに見えるようになってしまった、という吉川自身の変容
によるものなのだろうか。それとも取材当時から吉川の胸の内には
憤りが満ちており、それをGHQ占領下においては明かせなかつた
が、その後明かせるようになったという状況の変容によるもの
なのだろうか。いずれとも断定はしがたいが、ただ、自分の身
体を資料として差し出すことによつて「世界平和」と「世界医学」
に貢献するという吉川の企図は、挫折せざるをえなかつたとい
うことだけは確かである。これは吉川個人の問題ではない。自分
の身体を資料として差し出すことになった全ての被爆者にとつての
問題である。

一体、被爆者たちの身体の資料化は何に役立てられたのだろうか。
か。被爆者の治療を行うためには原爆が人体にもたらした影響を
調べることは当然必要であった。治療に役立てられた点について
は、確かに被爆者から得られた資料は医学に貢献したと言えるに
違いない。しかし、一九四七年三月、奇しくも吉川が入院してい

た広島赤十字病院に開設されたABC C（原爆傷害調査委員会）
によつて集められた被爆者の情報は、治療行為に還元されること
はなかつた。吉川はABC Cについて次のように語っている。

ABC C（原爆傷害調査委員会）広島研究所は、一九四九
年（昭和二十四年）七月、宇品の旧陸軍凱旋館で正式に開所し
た。しかし、原爆傷害の調査は、それよりずっと以前から、
米国の手ではじめられていた。私の直接の経験からも、その
ことはいえる。私が日赤病院に入院していた一九四七年、日
赤病院のレントゲン室が改造され、二ール中尉を頭に、二世
らしい女性五、六人という小さな規模ではじまつた。日赤病
院に勤務していた二世の外科医も、それに加わっているらし
かつた。私もそこに呼び出されたことがあつた。血液をとら
れ、被爆の状況をくわしく聞かれて、カルテに書きとられた。
それは私の入院治療とは、関係のない別のことであつた。

ABC Cの活動については、被爆者の不満や不安、疑惑と
批難の声が絶えなかつた。（略）治療は一切しないばかりで
なく、検査の結果も何一つ知らせはしなかつた。それではモ
ルモットではないか、というのであつた。

（『原爆一号』といわれて）

ABC Cが被爆者の身体を調べたのは、被爆者を治療するため
ではない。まして核兵器を廃絶するためでももちろんない。それは
米国が作り出した原爆の威力の検証しつつ、将来の核攻撃時の防
護計画を立てるといふ軍事的な目的を持つて採取されたものだ
のである。『世界平和』と『世界医学』に貢献するために差し
出されたはずの吉川の身体は、皮肉にも結果的にはその企図とは

反対のものに利用されたのだった。

このような被爆者・被曝者の身体の資料化は、その後も繰り返されたことである。一九四六年、米国が戦後初めて行ったビキニ環礁での核実験の後、マーシャル諸島の住人が受けた調査⁽¹⁾、一九四九年、ソ連が初めて行ったカザフスタンでの核実験の後、セミパラチンスクの住人が受けた調査⁽²⁾——。戦後の核開発の過程で実験動物のごとき扱いを受けた資料提供者⁽³⁾被曝者の系譜の発端に広島と長崎の被爆者を位置づけることはできるだろう。「原爆一号」こと吉川清が、彼の自任するごとく被爆者の代表であったというのは、「世界平和」と「世界医学」のためという企図とは裏腹に、核開発を補完するために利用された資料提供者としてであった。「原爆一号」の裸像は、核開発を抑止するのではなく促進する、触媒として眼差まなざされていたのである。

このような吉川の挫折を合わせ見ると、熊太の挫折は単なる平和運動の失敗以上の深刻な問題を内包していたことになる。入院中、妻・千里は熊太に語りかけられる。

「ねえ、私はここにながく、いすぎるのよ。人というものは、あんまり長くいるときらうものよ。私たちをいい研究材料とは思つていても、そのことと、人が人に飽きるというところとは違うのよ——」

〔暴露の時間〕第二節

入院当初、「新鮮な患者」(第二節)として迎えられた熊太は、「いい研究材料」としての価値以外の価値を認められないまま、自分を「露出症患者」と名指し、否定するにいたつたのだった。熊太の挫折は彼が被爆者の代表と見なされ、注目を集めた時期があつた分だけ露骨なものになった。それは露骨であるがゆえに、意志

とは無関係に身体を資料化され、核開発に利用されてしまった全ての被爆者がたどり着いたかもしれない挫折の在りようを端的に示す表象になりえているのである。一九五二年、原爆被害の公開に先立って、被爆者の身体しんたいの資料化は着々と進められていた。被爆者の代表として熊太が流す涙は、原爆以後、触媒としての身体しんたいの持ち主にさせられた人々の存在をも暴露しているのである。

注

- (1) のち『日本の原爆文学』第二巻(一九八三年八月、ぼるぶ出版)に収録。本論での引用は初出による。
- (2) ここで引用されている新聞記事は「冷笑はやめてくれ」「原爆一号」の吉川清さん(「朝日新聞」一九五二年五月四日)である。
- (3) 大田洋子「作家の態度」(「近代文学」一九五二年七月)によれば「ある批評家たちは、私の作品に対し「広島もの」と評したり、「原爆もの」と云ったり、「自分が書かずんばという風に気負いこんで書いている」と批評したりしています。こういう批評を私は困つたインテリだと思つし、これだから再軍備論者も容易にひつ込まないと思つたりします。(略) 江口渙氏が「新日本文学」で、「さすがの原爆ものも種ざれと見える。広島へ行って種を仕入れて来てはどうです、大田さん」と、文芸時評で書いていました。このごろは文学者が文学者らしくもないことを書くのが流行っていますが、こういう不謹慎なことをいう暇に自ら広島に出かけて裏町の隅々にどれだけの原子爆弾不具者が辛じて生きているか、一眼見て来るといいです」。

(4) この「日本博愛病院」は架空の病院である。ちなみに吉川清が一

九四六年三月から一九五一年四月まで入院していたのは広島赤十字病院である。

(5) 吉川清『平和のとしび』後記には「私達の入院以来、私達を御慰問下さった著名な方々は随分多い。又、外人の来訪も殆んど毎日あり、三千名以上に及んでゐる。／＼三笠宮殿下を始め奉り、元米第八軍司令官アイケルバーカー中将、米航空司令官ホワイトヘッド中将夫妻、米太平洋艦隊司令官長グリフィン大将、英連邦軍司令官ロバートソン中将、豪軍司令官ホブキンス代将、中国駐在英国大使ラルフステープソン夫妻、故UP副社長M・Wヴォーン氏、諸氏は公私御多忙中にも不拘、私達に激励の言葉を賜り、感謝に堪えない」とある。

(6) 「冷笑はやめてくれ、原爆一号」の吉川清さん（前出）。

(7) 『原爆第一号 ヒロシマの写真記録』（一九五二年八月、朝日出版社）の「海越えて、原爆一号へ便り」によれば「親愛なる吉川氏よ、国籍こそ違え君の気持はよく判ります。君が雑誌「ライフ」に発表した言葉は私たち米国人に多大な感銘を与えました。君の言葉に多くの米国人は同意し決して忘れはしないでしょう」と、未知の一人国人から日赤広島病院に入院中の吉川清氏（三六）に便りが届いた。

(8) 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』第四章（一九六五年六月、岩波書店）

(9) 「米国防総省 広島、長崎の原爆被爆者データ 核戦争研究に利用 ABCC収集解禁文書で「モルモット説」裏付け」（『毎日新聞』一九九五年七月三十一日）によれば「米国の原爆傷害調査委員会（ABCC）が広島、長崎の被爆者から収集した医学データを、国防総

省が将来の核戦争を想定した軍事目的の研究にも利用していた事実がこのほど、同省や全米科学アカデミーなどの解禁文書で確認された。／国防総省は、核使用の際の医療対策に収集データが役立つと期待。広島、長崎のデータとピキニ環礁での原水爆実験の資料を比較し、爆心周辺で放射線から身を守るには服装をどうするか、などといった分野も研究していた。／ABCC設立当初から被爆者が抱いていた「モルモット扱いしているのでは」という疑いを裏付けるものだ。／また日本で「ABCCの研究は非人道的」との非難が強まることを恐れた米側が、病理標本や各種データを重要機密資料として、その保護に極度に配慮していたことを示す文書も見つかった。

／一九四六年十一月二十六日、トルーマン大統領は「原爆が人間に与える長期的影響の研究を継続すべきだ」との陸、海両軍医務総監の勧告を承認。これを受けて全米科学アカデミー研究評議会に原爆傷害委員会（CAC）が設置され、現場機関として広島、長崎にABCCが充足した。／四八年六月に「特殊兵器プロジェクト」（国防総省国防核兵器局の前身）のハズブルック参謀長がまとめたメモは、被爆者データは「放射能戦争研究に非常に重要」だと、核攻撃の際の死傷者数や負傷者の治療などに関する情報への利用に期待を表明した。／ABCCで収集されたデータや生検、解剖標本はこうして同プロジェクトや陸軍病理研究所で保管され、四七―四九年来にまとめられた核戦争防護の各種研究に生かされた。／同プロジェクトのワイナント放射線防衛局長の論文は広島、長崎より良い防護施設がなければ「米国の大都市では十万人以上の死傷者が出る」と核シエルトの重要性を強調。ホートン同局医療部長の論文は、広島、長崎の被爆者の生殖能力や遺伝的影響などのデータを引用した。／

さらにクローニー原子力委員会軍事応用局放射線部長の論文は、広島、長崎でのデータとビキニ実験との比較から身体器官への影響を分析。「爆心から一・五^キ離れた地点なら軍服、シャツの着用でも防護になる」などと指摘した」。

(10) 豊崎博光『マーシャル諸島 核の世紀 1914 - 2004』上巻 (二〇〇五年五月、日本図書センター) IV-5 「放射能データ提供者」

としての被曝島民」によれば「ロンゲラップ環礁住民が故郷の島に戻った時、非被曝住民一六五人は顔写真が付き、名前、性別、客体番号、生まれた年、出生場所、婚姻の有無と子どもの数が記入されたピンク色の証明カードを持たされた。カードの上部には、「特別医療グループ。ロンゲラップ非被曝者」と印刷されていた(略)水爆ブラボー実験の灰を浴びた八二人(略)とその後に生まれた胎内被曝者四人は以前から緑色の証明カードを持たされていた。故郷の島に戻った被曝、非被曝ロンゲラップ環礁住民は、「人間に関

する価値ある環境放射能データを提供すること」を担わされたのである」。

(11) 森住卓『セミパラチンスク 草原の民・核汚染の50年』(一九九九年九月、高文研)によれば「セミパラチンスク放射能学・環境研究所は、市内のガガーリン通りにある。(略)ここには、四万三三三人のカルテがあり、一人一人の放射能の影響が記録されている。さらに被曝地域の汚染データや、ガンなどによる死亡診断書や染色体のサンプルも保管されている」。

付記

本論は、第二二回原爆文学研究会(二〇〇七年一〇月二〇日、於九州大学)での研究発表をもとに、新たに論としてまとめたものである。質疑を通じて様々な示唆を与えてくださった方々に心より御礼を申し上げます。